

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] vol.255

4-5

April & May 2023

特集

02

マルタ・アルゲリッチと
ダイエゴ・マテウス



©脳屋伸光



- 02 水戸室内管弦楽団 第111回定期演奏会
- 06 藤村実穂子 メゾソプラノ・リサイタル
- 08 ちょっとお昼にクラシック 菊池洋子(ピアノ)インタビュー
- 10 INFORMATION

水戸芸術館
ART TOWER MITO

マルタ・アルゲリッチとディエゴ・マテウス 南米の二つの国が育んだ二人の音楽性

文：篠田大基



©堀田力丸



5月13、14日に水戸芸術館で水戸室内管弦楽団(MCO)第111回定期演奏会が、5月16日には東京公演が東京オペラシティで、開催されます。今回の演奏会で水戸室内管弦楽団が迎える2人の共演者は、偶然ではありますが、どちらも南米生まれの音楽家となります。

まず、今回が初共演となる指揮者のディエゴ・マテウス氏は、南アメリカ大陸の北部、カリブ海に面したベネズエラの出身です。世界的に有名になったベネズエラの音楽教育「エル・システム」で学び、現在はヨーロッパの数々の歌劇場の指揮台に立ち、各国のオーケストラと共演を重ねています。MCOと多くのメンバーが共通するサイトウ・キネン・オーケストラとは、2011、14、18、19年の4回にわたって共演し、小澤征爾総監督の信頼も厚く、2018年にはドイツ・グラモフォン創立120周年スペシャル・ガラ・コンサートで小澤総監督と同じ舞台に立ちました。また昨年に

は、小澤征爾音楽塾首席指揮者就任のニュースが話題を呼びました。

そしてもう一人が、現代最高峰のピアニストと称えられるマルタ・アルゲリッチ氏で、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスのお生まれです。MCOとは2017年の第99回定期演奏会以来、18年、19年、そしてコロナ禍を挟んだ22年とコンスタントに共演を重ね、今回でついに5度目の共演となります(いずれも別府アルゲリッチ音楽祭との共同制作)。これまでにアルゲリッチ氏と演奏してきた作品には、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第1、2番(小澤総監督指揮。CD発売)、ショスタコーヴィチのピアノ協奏曲第1番、シューマンのピアノ協奏曲、というように、彼女が長年弾き続け、大切にしてきた名曲が選ばれており、どの回でもエキサイティングなアンサンブルが生まれました。今回の

共演に選ばれたラヴェルのピアノ協奏曲も、アルゲリッチ氏のピアニストとしての名声を築いた1曲として知られています。5月にはどんな演奏を聴かせてくださるのか、期待が高まります。

ヨーロッパ発祥のクラシック音楽の世界にも、南米出身の音楽家は数多く活躍しています。演奏家に関して言えば、アルゼンチンにはアルゲリッチ氏(1941年生)のほか、同年代にブルーノ・レオナルド・ゲルバー(1941年生)やダニエル・バレンボイム(1942年生)といった巨匠ピアニストがいますし、一世代上には指揮者カルロス・クライ



バー(1930～2004)がいました。クライバーはアルゼンチンの生まれではないものの(5歳のときにドイツからアルゼンチンに亡命)、南米というヨーロッパから離れた土地で育ったことが、彼の音楽性にも大きな影響を与えていたようです(これに関しては、片山杜秀氏の『クラシックの核心』に興味深い論考があります)。アルゼンチンの隣国チリにはクラウディオ・アラウ(1903～1991)、ブラジルにはネルソン・フレイレ(1944～2021)のような大ピアニストがいました。ウルグアイ出身の指揮者で作曲家のホセ・セレブリエール(1938年生)は、タンゲルウッド修行時代の小澤征爾氏のルームメイトで、北アメリカを中心に活躍しています。若い世代ではグスターボ・ドゥダメル(1981年生)やディエゴ・マテウス(1984年生)をはじめ、ベネズエラのエル・システマ出身の音楽家たちが注目を集めています。

ところで、「南米」と一口にいっても大陸の北から南まで、風土も国ごとの歴史や文化も異なります。私たちは「ラテン」という言葉から、たとえば「情熱的」「陽気」「自由」といったステレオタイプなイメージを持ちやすいのですが、上述した演奏家たちを眺めてみても、そのようなイメージが様に当てはまるわけではありません。そもそも演奏の特徴はそれぞれとても異なっています。しかし、表面的なイメージを排して南米のそれぞれの国の歴史や文化を掘り下げてみると、そこで生まれ育った音楽家たちの音楽性がそうした歴史や文化と無関係でないことにも気が付くのではないでしょうか。ここでは、5月の演奏会に出演するマルタ・アルゲリッチ氏とディエゴ・マテウス氏の故国であるアルゼンチンとベネズエラでクラシック音楽がどのように受容されてきたのかを紹介しながら、それぞれの国が育んだお二人の音楽性の源泉を探ってみたいと思います。

アルゼンチン

～移民の国のコスモポリタン性～

アルゲリッチ氏が生まれたアルゼンチンの首都ブエノスアイレスは、「南米のパリ」とも呼ばれ、ヨーロッパ風の街並みが有名です。その風景はアルゲリッチ氏の音楽にも通じるところがあると言えるかもしれません。アルゲリッチ氏もヨーロッパの19世紀ロマン派音楽をメインのレパートリーにしており、故国アルゼンチンの作曲家のヒナステラやピアソラの音楽を弾くこともあるものの、頻度としては、ヨーロッパの作品と比べて決して多くありません。この点は、たとえば非ヨーロッパ圏の多くの演奏家、あるいはヨーロッパでも北欧や東欧の演奏家が、自国で生まれた音楽を大切なレパートリーとして精力的に取り組む姿勢とは、違った態度に思われます。アルゲリッチ氏が故国の音楽を軽んじているわけでは決してありません。むしろアルゲリッチ氏は「アルゼンチンの音楽家」というよりも、国境や民族の垣根を超越した「コスモポリタンの音楽家」と言うてよいのではないのでしょうか。そしてもしかすると、この「コスモポリタン性」こそが、じつは「アルゼンチンらしさ」なのかもしれない、とブエノスアイレスのヨーロッパ風の街並みを思い起こして考えたりもします。ブエノスアイレスの歴史を紐解いてみましょう。

「春の香りがした。北の遅い春の香り。私は春の香りが好きだ。木々が茂る鮮やかな緑にまじり、ところどころ白樺で真っ白になった丘の間を鉄道は走る。[中略]大好きな季節に気づかずに過ごすところだった。九月のアルゼンチンの花咲く大草原で、春に会えることばかり楽しみにしていた。」(プロコフィエフ 1918年5月19日の日記より)

1918年5月、交響曲第1番〈古典的〉(今回の演奏会でも取り上げられる1曲)の初演を終えたばかりの気鋭の作曲家プロコフィエフは、ロシア革命の動乱を避けるためにシベリア鉄道に飛び乗りました。彼はまず、ウラジオストクから日本を經由してブエノスアイレスに渡航することを計画し、列車のなかでスペイン語の勉強もしています。結局彼は日本で南米行きの船に乗ることができずに、ハワイ経由で北アメリカに渡ることになるのですが、シベリア鉄道の車内で綴られたプロコフィエフの日記からは、アルゼンチンへの憧れが伝わってきます。彼がアルゼンチンを目指した理由は明らかではありません。ただ、当時のアルゼンチンが経済発展著しく、特に首都のブエノスアイレスは文化的にも優れた水準にありました。それはプロコフィエフにとって大きな魅力だったはずです。

アルゼンチンは移民の国です。19世紀後半、輸出産業の発展に伴う人手不足を補うために移民の受け入れを緩和した結果、アルゼンチンにはヨーロッパ各国から多数の移民が流入することになりました。1854年に人口9万人の小さな街だったブエノスアイレスは、1895年には人口67万人にまで急速に膨れ上がり、20世紀になると人口100万人を超える南米最大の都市へと変貌を遂げたのでした。

ヨーロッパでの恵まれなかった生活を打開するためにブエノスアイレスに移住した人々がまず夢見たのは、故国で叶わなかった中流階級の生活でした。ブエノスアイレスの街がヨーロッパの都会を模して作られたのも、移民たちがヨーロッパ風の生活を好んだためでした。移民の中で大多数を占めていたイタリア人たちはオペラを熱望し、1908年、ミラノ・スカラ座の外



観を彷彿とさせるテアトロ・コロロン（コロロン劇場）が完成します。こけら落としはヴェルディの大作〈アイダ〉。ブエノスアイレスの市民は熱狂したといえます。1918年にロシアを出国したプロコフィエフも、ブエノスアイレスであれば、ヨーロッパと変わらない生活が送れると期待したのかもしれませんが。

当時のヨーロッパの演奏家たちも、数多くブエノスアイレスを訪れています。四季が逆転している南半球は、ヨーロッパのシーズン・オフに演奏活動をするには都合が良かったので、多くの演奏家がブエノスアイレスに1か月以上の長期滞在をしたといえます。アルゲリッチ氏が生まれた1940年代には、トスカニーニ、フルトヴェングラー、カラヤン、バックハウス、ギーゼキング、ルービンシュタインなど、綺羅星の如き演奏家たちがブエノスアイレスで演奏しています。さながら、当時のヨーロッパのクラシック音楽シーンを濃縮したような状況ではないでしょうか。少女時代のアルゲリッチ氏は母親に連れられて高名なピアニストの演奏を聴き、面会してピアノの腕前を披露したり、サインをもらったりしていました。後に師事することになるフリードリヒ・グルダとの交流も、そのようにして始まったのです。

ヨーロッパでない土地に作られたヨーロッパ風の世界。そこに生きる人々のヨーロッパへの渴望と、憧れたものを自分のなかに食欲に取り込もうとする強靭さ。そのような土壌に、アルゲリッチ氏のコスモポリタン性は育ま

れてきたはず。5月に演奏されるラヴェルのピアノ協奏曲は、このコスモポリタン性が十全に発揮される音楽ではないでしょうか。ラヴェル自身が「モーツァルトとサン＝サーンスの精神で作曲された」と語り、しかもラヴェルと縁の深いバスク地方やスペインの音楽、更にはジャズの要素まで取り入れられた、まさにコスモポリタンの音楽なのです。

ベネズエラ

～エル・システムが伝えるもの～

ヨーロッパからの移民とともにクラシック音楽を受け入れ、急速に根付かせたアルゼンチンに対して、ベネズエラにおけるクラシック音楽の発展はずっとゆっくりとしたペースでした。1930年代にベネズエラ交響楽団が創設され、国の支援を受けながら活動を開始しましたが、団員は大多数が外国人で、1970年代になってすらも、「一般のベネズエラ人にオーケストラ活動ができるはずがない」と考えられていたそうです。聴衆も富裕層のごく一部に限られ、一般にはほとんど普及していませんでした。エル・システム出身でベルリン・フィルハーモニー管弦楽団に入団したコントラバス奏者のエディクソン・ルイス（1985年生）は、9歳で音楽教室を訪ねたときのことを、こう語っています。

「衝撃的なものを見たのです。それは、コントラバスという楽器でした。当時、僕はまだコントラバスという楽器が、どういう音を出し、どのように弾くのかもわかりませんでした。」（山田真一『エル・システム—音楽で貧困を救う南米ベネズエラの社会政策』53頁）

ルイスはそれまでクラシック音楽

を全く聴いたことがなかったのです。エル・システムはこのような状況のベネズエラで活動を開始し、クラシック音楽を着実に根付かせていったのです。

エル・システムは音楽家のホセ・アントニオ・アブレウ（1939～2018）が1975年にベネズエラの首都カラカスで、ベネズエラ人メンバーによる国立のユース・オーケストラをつくろうとしたことに端を発します。最初に集まったのはわずか8人。演奏の基礎も不十分なレベルでしたが、アブレウが団員集めとともに国内外での演奏活動を精力的に展開し、オーケストラで演奏することの楽しさを広く伝えたことにより、創設から1年後には150人近い規模に成長しました。さらに1977年からは政府からの経済支援も得られるようになり、またカラカス以外の街にもユース・オーケストラを組織する動きが広がって、いくつもの地方支部ができてゆきます。1978年、国立ユース・オーケストラは現在の名称であるシモン・ボリバル・オーケストラに改称。1979年にはオーケストラ活動と楽器教育事業を運営するFESNOJIV＝Fundación del Estado para el Sistema Nacional de las Orquestas Juveniles e Infantiles de Venezuela（ベネズエラの児童および青少年オーケストラの国家的システムのための国家財団）が設立されました。「エル・システム」（＝システム）という名称はこの組織名に由来します。

エル・システムの最大の特徴は、政府の支援によって子どもたちには無償で楽器と音楽指導が提供されるという点にあります。さらに、高校生以上が所属するユース・オーケストラに入団すると奨学金が支払われ、オーディションに合格したメンバーで構成



シモン・ボリバル・オーケストラ ©Welland

される選抜オーケストラに入団できればセミプロの扱いで給金も支払われます。これが貧困対策や犯罪や非行への抑止につながることから、ベネズエラの社会政策の一環として推進され、世界的な注目を集めるようになりました。エル・システムは現在、ベネズエラ国内で60万人もの子どもたちが学ぶ「世界最大の音楽教室」となっています。

しかしここで忘れてはならないのは、エル・システムが、ベネズエラの社会政策と連動した音楽の裾野を広げる役割とともに、選抜オーケストラなどを通じて優秀な子どものモチベーションを高め、育成する役割も担っている点です。ディエゴ・マテウス氏のようなエル・システム出身で世界的な評価を勝ち取った音楽家が数多く登場したことも、エル・システムが注目された理由の一つでした。いわば底辺を広げるシステムと頂上を高めるシステム。この2つの役割の原点にあったのは何だったのでしょうか。それは、アブレウが子どもたちに伝えようとした、オーケストラで演奏する楽しさだったように思えます。1975年にベネズエラ人によるユース・オーケストラを立ち上げたばかりのアブレウは、演奏の基礎ができていない子どもたちにも演奏会の舞台に立たせ、しかも短期間に国内外での数多くの演奏会

を経験させていました。まるで、音楽する喜びを何度でも味わえる、音楽の楽しさに際限はない、と言おうとしていたかのようです。現在でも、エル・システムで学ぶ子どもたちは、楽器がまだ十分に弾けない段階からオーケストラに入って合奏を経験するそうです。マテウス氏は次のように語っています。

「[エル・システムでは]日本とは違い、個人練習から楽器を始めるのではなく、いきなりオーケストラの一員として弾くんです。楽器が弾けなくてもやる。オーケストラという集団の中で演奏できることがすごく好きで、それがモチベーションになりました。その中にいるだけでも楽しいから、弾きたいという気持ちになれたんです。」(小澤征爾音楽塾のインタビューより)

マテウス氏の「[集団の]中にいるだけでも楽しい」という言葉は印象的です。その楽しさを感じられるからこそ、彼は労力を惜しまずにオーケストラの団員とコミュニケーションをとり、音楽をより良いものに練り上げようとするのでしょう。5月の演奏会の前半でマテウス氏が指揮するプロコフィエフの交響曲第1番〈古典〉とストラヴィンスキーの〈プルチネッタ〉組曲は、MCOでは過去に小澤征爾総監督も指揮した作品です(〈古典〉交響曲は2000年の第41回定期と久慈公演、〈プルチネッタ〉組曲は1998年のヨーロッパ公演と第33回定期で演奏。CD発売)。小澤総監督が作ってきたMCOの音楽に、小澤総監督が信頼を寄せるマテウス氏が新たな息吹を与えることになります。どんな演奏が生まれるのか、5月の演奏会をどうぞ楽しみになさってください。

●参考文献

片山杜秀『クラシックの核心—バツハからグールドまで』(河出書房新社・2014年)

バレンボイム、ダニエル『ダニエル・バレンボイム自伝』蓑田洋子訳 増補改訂版(音楽之友社・2003年)

プロコフィエフ、セルゲイ「プロコフィエフ 日本滞在日記」サブリナ・エレオノーラ、豊田菜穂子訳『プロコフィエフ短編集』所収、165-209頁(群像社・2009年)

ベラミー、オリヴィエ『マルタ・アルゲリッチ—子供と魔法』藤本優子訳(音楽之友社・2011年)

増田義郎「ブエノスアイレス—ガルデルとボルヘスの町」荒このみ編『7つの都市の物語—文化は都市をむすぶ』所収、173-202頁(NTT出版・2003年)

山田真一『エル・システム—音楽で貧困を救う南米ベネズエラの社会政策』(教育評論社・2008年)

山田真一「ディエゴ・マテウスを育んだもの—『エル・システム』出身の逸材」『サイトウ・キネン・フェスティバル松本2011 プログラム』所収、46-47頁。

小澤征爾音楽塾ウェブサイト「インタビュー 指揮 ディエゴ・マテウス」(2023年2月1日)

https://rohmtheatrekkyoto.jp/archives/interview_diego-matheuz/

ベネズエラ大使館ウェブサイト「エル・システム」

https://venezuela.or.jp/trivia/el_sistema/

■公演情報

水戸室内管弦楽団・
別府アルゲリッチ音楽祭共同制作
水戸室内管弦楽団
第111回定期演奏会

2023.5.13(土) 19:00、14(日) 15:00

指揮: ディエゴ・マテウス

ピアノ独奏: マルタ・アルゲリッチ

全席指定 S席 ¥18,000、A席 ¥15,000、

B席 ¥12,000 予定枚数終了

●プログラム

プロコフィエフ: 交響曲 第1番 二長調

作品25 (古典的)

ストラヴィンスキー: 組曲(プルチネッタ)

コダーイ: ガランタ舞曲

ラヴェル: ピアノ協奏曲 卜長調

藤村実穂子(メゾ・ソプラノ)



©R&G_Photography

コロナで欧米のコンサートホールやオペラハウスが2年以上閉鎖された間、私は日本に8回帰ってきた。帰国する度に実質15日間の強制隔離があった。帰国し空港で検査し、陰性であれば厚生省指定の車で申請した住所に移動し、そこから外に一歩も出ることが許されない。毎日何度も現在地の確認があり、また室内にいる事を確認するのであるう1分間自分の顔と背景を移せと命令される。それを合計120日行った計算になる。8回目の隔離は、政府の指定する宿泊施設で8日間の強制隔離後、7日間別の申請した場所というものになってしまった。3歩歩けば壁、部屋でストレッチもヨガも出来なかった。狭い部屋から見える景色は真向いの巨大立体駐車場

のみで空も見えず、刑務所に入れられた気分だった。丁度ロシアのウクライナ侵攻が始まった時期で、自分の住んでいる2国向こうで起きている戦争の報道を毎日見ていた。今までの放送映像とは違い、住民がスマホで撮る現状の映像は生々しい。ユーゴスラビア戦争の頃私はミサイルの十分届く地域に住んでいたが、陸続きのヨーロッパにいると有事の恐ろしさは身をもって感じるものとなる。

見ているうちにふと祖母の事が思い浮かんだ。祖母は満州に渡ったのち日本に帰り、東京大空襲で足を骨折したが戦争中なので治療が出来ず、折れた足を抱えたまま最期を迎えた。戦争の事は殆ど語らずよく足をさすっていた。工場の休憩サイレンになると苦しそうに耳をふさぐので「どうしたの?」と訊くと「空襲警報」と言い、雷が鳴ると「B29」と言って5枚の布団の下で大汗をかいていた。希望と期待で渡った満州。そこから帰るのは壮絶だったと聞く。現在ウクライナで起こっている映像が流れて初めて祖母の体験が想像できる今、当時まだ小さかったとはいえ、祖母の大変さを少しでも想像してあげられなかったことを後悔している。「大変だったね」と孫から言われた

ら、祖母も少しは慰められたらうに。そして毎回の強制隔離を面倒と思いついてきた自分を深く恥じた。それはきっと自分が平和で便利な社会で育ったからである。スマホを撫でれば自分の好きな物が好きな日時に届き、リモコンを押せば好きなチャンネルに変えられるし電気もつくし、日本にはコンビニもある。ただ日々耳をふさぎたくなるような事件が起こる度、ふと思う。人は人を「物」のように思い始めたのではないかと。ピッとすればテレビは黙るのに子供はそうはいかない。ゲームをしていて「もういい」と思えば止められるけれど、人間はそうはいかない。スマホやコンピューターのような「物」でなく、「人間」がそうなった時の対処方法、コミュニケーションの方法を、自分も含めた現代の人間は知らないのではないかと。

私の知人は広島原爆に被爆した方のお話を聞いた際「あなたには分からない」と言われたそうである。そう、体験していない我々が、被爆した方々の苦悩や悲しみなど到底分かるはずがない。爆弾の音、恐怖、周りに飛んできた物や空気、助けを求める人々等の状況を、話を聞きながら想像するのみである。そして想像することは、現代の我々にとって非常に少なくなっている。

ユダヤ人収容所のアウシュビッツで生き残った現在101歳のマルゴット・フリードレンダーさんは自分の身に起こった体験を高校生など若い人々に伝える会でこう言っていた。「人間でありなさい。敬意をもって人に接しなさい」。自分が相手だったらこう言われて傷つくのではないか、その人の立場になって考える。そう思いながら日々行

動するのは本当に大変である。人を傷つけずに生きていく事はほとんど無理である。「人間自分の事も分からないのに、他人の事まで分かるはずがない」と言われればその通りである。だけど、と私は思う。分かるとうとする気持ちが大切なのではないかと。自分がその場にいたのではないから分からなくとも、想像することはできるはずである。それが「人間であること」なのかもしれない。コロナがあって、戦争があって他人を思う大切さ、命の重みを、いままさながら思いかえすこととなった。



2018年2月のリサイタルより

私が歌曲の夕べの曲を選ぶとき、曲の歌詞の並べ方で一つの物語を作りたいと思っている。そして詩人がどういう気持ちでこの言葉にし、その言葉に作曲家はどう感じたからこういう音を与えたのだろうと想像する。歌うだけで涙が出てくる曲もあれば、同じ小節を何度も何度も繰り返してじわじわと滲み出てくる曲もある。作曲者がどう感じたらこの和音にしたのか、何故ここで変調するのかと考えたり、本能に感じさせる。そしてこの表現でいいのか何度も疑う。何故なら作曲したのは他人様であり、詩の主人公は「私」ではなく、その時代にしかなかった職業或いは立場の人だからである。主人公の年齢はいくつで、どんな生活をしているからこういう詩になったのかくみ

取る。非常に不器用な私はそんな作業を1年以上繰り返す。そしてその主人公であることが出来るのは、舞台上歌っている時間のみである。聴いて下さっている全く知らない方々と、その一瞬一瞬、瞬間瞬間を共有する。それは酸素でできた透明な糸で一人一人とつながり、自由になれるひととき。手間と愛情をかけて育てた花の硬いつぼみの小さな花びらが、ひとつひとつゆっくりと開いていくのと似ている。

1989年に出会ってから常に素晴らしいピアノを聞かせてくれるヴォルフラム・リーガーだが、日本政府がコロナ対策として外国人は日本に入国できない措置を取ったため、本来予定していた日程に日本入国出来ないことと

は稀有なため、公演の日程を延期させて頂くこととした。すでにチケットをお求めになっていた皆様、そしてホールの皆様にも多大なるご迷惑をお掛けしたことに、この場をもって心からお詫び申し上げます。そしてチケットの払い戻しを受け付けた方々に、心無い言葉が掛けられなかったようにと心から願っています。なぜなら言葉は味方にもできるけれど、この上なく鋭利な刃物でもあり得るから。

■公演情報

藤村実穂子

メゾ・ソプラノ・リサイタル

2023.4.16(日) 15:00

ピアノ:ヴォルフラム・リーガー

全席指定 一般¥5,000、

U-25(25歳以下)¥1,500

●曲目

モーツァルト:

静けさは微笑み K.152(210a)

喜びの鼓動 K.579 / すみれ K.476

ルイーゼが不実な恋人の手紙を焼く時 K.520

夕べの想い K.523

マラー: さすらう若人の歌

第1曲 恋人の婚礼の時

第2曲 朝の野を行けば

第3曲 胸の中には燃える剣が

第4曲 恋人の二つの青い眼

ツェムリンスキー: 6つの歌 作品13

1. 三人姉妹

2. 目隠された乙女たち

3. 乙女の歌

4. 彼女の恋人が去った時

5. いつか彼が帰ってきたら

6. 城に歩み寄る女

細川俊夫:

2つの子守唄 (日本民謡集より/編曲作品)

1. 江戸の子守唄

2. 五木の子守唄



共演のヴォルフラム・リーガー

なりました。言葉と音を突き止めようと毎回必死になってくれるヴォルフラム。舞台上共に詩の中の同じ絵を見、同じ空気を吸い、主人公の立場に「いて」くれるピアニスト

「珠玉のピアノ小品集」でヨーロッパ旅行を

菊池洋子(ピアノ)インタビュー

聞き手: 関根哲也



演奏者自身の耳でピアノがどのように響いているか聴くために、演奏中の姿勢はいつも意識しています。前屈みの姿勢になると、音も、視野も、自分の意識も、狭い範囲に限られてしまいます。「理想はラドゥ・ルブーやアンドラーシュ・シフだ」とスカラ先生はおっしゃっていました。ルブーは背もたれ付きの椅子を使い、そこに背をほとんど付けたまま弾いています。ピアノの鍵盤と自分の体との間にスペースができていれば、腕もリラックスした状態を保てますし、コントロールもしやすくなります。そう言えば、アルゲリッチさんも手の動きは結構ありますが、体の重心はしっかりと安定していますよね。

—プロフィールを拝見していて、イタリアに留学というのが目にとまりました。

私が高校を卒業する少し前に、恩師である田中希代子先生が他界されました。希代子先生は17歳か18歳でパリに留学なさっていたので、ちょうど同じような年頃の自分も留学してみたいという気持ちが自然に湧き起りました。留学先として、ピアノでは一般的なフランスやドイツではなく、イタリアを選んだわけですが、高校生の頃、上野の東京文化会館で国際コンクールをやっていて、毎日学校の帰りに聴きに行っていました。私が惹かれる演奏をしている人のプロフィールを見ると、ほとんど「イタリアのイモラ音楽院でフランコ・スカラ教授に師事」と書いてあったんです。皆さんすごく个性的な演奏をしているのに、習っている先生が同じということにも興味をひかれ、どうしてもスカラ先生のレッスンを受けてみたいと思いました。

—実際に留学されていかがでしたか。

「洋子はこの曲にどんなイメージを持っているの?どんな風に弾きたいの?」とまず聞いてくれて、それを実現するためのテクニックや体の使い方を教えてくださいました。まさにそれぞれの生徒の個性を伸ばすという形のレッスンで、先生が「ここはこうだよ」と決めつけるようなことは一切ありませんでした。スカラ先生は、あのアルゲリッチさんの幼少期の先生でもあるスカラムツァ氏にも習ったことがあり、そういうテクニック的なものを受け継いでいる先生です。どんな人でも、練習ではうまくいくのに、本番では緊張してしまって思い通りいかなかったという経験があると思うのですが、どうしてそういう結果になってしまうのか、スカラ先生は心や体のメカニズムの研究もされていました。

—菊池さんは、ピアノを弾いている時に意識していることはありますか。

—菊池さんはフォルテピアノも演奏なさいますね。

古楽器を弾くようになったきっかけもスカラ先生なのです。スカラ先生はご自身の趣味として、年代物の鍵盤楽器を120台くらい所有されていたんです。そのコレクションを、私が当時住んでいた建物の下の階に置いていらして、夜はご自分の楽しみのためだけにそこに来て色々な楽器を弾いていらっしました。その音が上の階の私の部屋まで聴こえてきて、面白い音がする楽器があるなと思っていました。そのうちスカラ先生がイモラ音楽院にフォルテピアノ科を作ることになり、私も3年間、勉強することになりました。

—2002年にはモーツァルト国際コンクールで優勝なさいます。

その時はモダン・ピアノを弾いたのですが、古楽器で勉強したことを活かす

良い機会になりました。高度に工業製品化された現代の楽器と違って、フォルテピアノは本当に1台1台が手作りで、楽器ごとのキャラクターが違います。さらに、オクターヴごとにまるでバス、テノール、アルト、ソプラノというような音色の違いもあります。私はモーツァルトの音楽は対話の音楽だと思っていて、どの曲でもまるで言葉をしゃべっているかのように聞こえるべきだと考えていますので、フォルテピアノの音色や発音の仕方を学べたことはすごく大きかったですね。お客様の中には、私がモダン・ピアノでモーツァルトを弾いている時でも「フォルテピアノの音が聴こえました」と言ってくれる人が結構いて、とても嬉しく思っています。

— 今回のコンサートではお得意のモーツァルトも弾いてくださいますね。

“ピアノ小品集”とのリクエストをいただいたので、モーツァルトの〈きらきら星変奏曲〉をはじめ、どなたでも親しみやすい曲をプログラミングしてみました。その中で、ちょっとショスタコーヴィチの曲が入っていたり、自分で編曲したチャイコフスキーの〈白鳥の湖〉の“情景”があったり、変化に富んでお楽しみいただけるのではないかと思います。絶対に日本の方が聴いたことがないと思われる曲がクラフリックの〈トッカータ〉。クラフリックは、ホルン奏者のラデク・バボラークさんとお友達のチェコの作曲家で、〈トッカータ〉という題名ですが、まるでラテン系のダンス・ミュージックみたいなノリのいい曲です。

— プログラム全体としてはヨーロッパを旅するようなイメージでしょうか。

そうですね、音楽で旅するような。最初はドビュッシーでフランスから出発

し、ウィーンに行ってモーツァルト、シューベルト、ベートーヴェン。そしてチェコに行ってクラフリック、次はハンガリーに行ってリスト。そこからロシアに渡ってチャイコフスキーやショスタコーヴィチを聴いて、またウィーンに戻ってくる感じですね。

— バボラークさんは水戸室内管弦楽団のメンバーとして水戸芸術館のお客様にもお馴染みですが、よく共演されていますね。

知り合ってもう20年くらいになります。最初は彼がやっていたアフラートウス・クインテットのレコーディングのお話をいただいたのがきっかけでした。

私がベルリンに住み始めた頃、「これから長い目で見て僕のデュオのパートナーとしてやっていく気はある?」と聞かれ、「もちろん」と答えました。そして、具体的なリサイタルはまったく決まっていなくてもかかわらず、私たちは毎週火曜日にフィルハーモニーの練習室を予約して長い時間リハーサルしました。リハーサルというより私が彼の特訓を受けたという感じでしたが、本当に豊かな時間でした。ラデクは思いつきで変わったことをする音楽家ではありません。作曲家のスタイルというものをリスペクトし、いかに楽譜に忠実に演奏するかをモットーとしながら、その枠の中でいかに自由に演奏するか、というのが彼の基本姿勢です。私の音楽作りの方向性も、彼の影響を多大に受けていると思います。

— 菊池さんがヨーロッパの拠点としてウィーンを選んだわけは?

私の主なレパートリーがモーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトなどウィーンで活躍した作曲家の作品です

ので、ウィーンに落ち着いたのは自然な流れだったと感じています。街を少し歩くと、どの作曲家がいつからいつまでここに住んでいたという記録が見つかります。ブラームス、マーラー、シュトラウス…偉大な作曲家たちの名前がそこかしこにあり、彼らの存在を身近に感じることができます。コロナもあって、この2年半ほどずっとウィーンに行けなかったのですが、昨年9月ごろから少しずつヨーロッパでも活動できるようになりました。さらに、この3月からウィーン国立音楽大学で教えることも決まりました。

— ますますお忙しくなりますね。

パンデミックの時代を経験して、インターネットで世界の様々な情報が得られることもわかりましたが、やはり実際に自分がウィーンに行って、肌で感じることの大切さも、そこに暮らすことでしか得られないことも、あらためて感じる事ができました。これからもウィーンの伝統を可能な限り学んで、お客様に届けていければと思っています。

(2023年2月7日 Zoomにて)

■公演情報

ちょっとお昼にクラシック 菊池洋子(ピアノ) ～珠玉のピアノ小品集～

2023.4.26(水) 13:30
全席指定 ¥1,500

●曲目

ドビュッシー：月の光
モーツァルト：きらきら星変奏曲 K.265
シューベルト：即興曲 作品90の2
ベートーヴェン：エリーゼのために
クラフリック：トッカータ
リスト：愛の夢 第3番
チャイコフスキー：〈白鳥の湖〉より 情景
ショスタコーヴィチ：
バレエ組曲 第3番より ララバイ
ショスタコーヴィチ：〈黄金時代〉より ボルカ
パーバー：子守唄
グリュンフェルト：ウィーン之夜

INFORMATION

※以下は3月2日現在の情報です。

公演等に関する最新情報は当館Webサイトにてご確認ください。

チケット・インフォメーション

〈3.25(土)発売分〉

■田中宏明 ピアノ・リサイタル
6.10(土) 17:00

〈4.29(土)発売分〉

■オルガン・レクチャーコンサート Vol.7
7.2(日) 19:00

■中村真由美・中村佳代 デュオ・リサイタル
7.9(日) 15:00

〈4.29(土)発売分〉

■Ensemble cinq couleurs
8.20(日) 14:00

〈5.27(土)発売分〉

■0歳からのわくわく
オルガン・コンサート
8.11(金祝) 11:00

4・5月の主な音楽イベント

コンサートホールATM

◆藤村実穂子 メゾ・ソプラノ リサイタル

4.16(日) 15:00
料金[全席指定]一般¥5,000/U-25(25歳以下)¥1,500

◆ちょっとお昼にクラシック 菊池洋子(ピアノ)

4.26(水) 13:30
料金[全席指定]¥1,500(カップオン サザススペシャルブレンド1枚付)

◆水戸室内管弦楽団 第111回定期演奏会

5.13(土) 19:00、5.14(日) 15:00 予定枚数終了
料金[全席指定]S席¥18,000/A席¥15,000/B席¥12,000

エントランスホール

◆パイプオルガン・プロムナード・コンサート(入場無料/要事前予約)

- 4.2(日) 12:00~12:30/13:30~14:00 塩澤真輝
- 4.22(土) 12:00~12:30/13:30~14:00 大谷内映
- 5.4(木祝) 13:15~14:00 龍田優美子&丁大龍 ★ゴールデンウィークスペシャル
- 5.28(日) 12:00~12:30/13:30~14:00 平野由衣

茨城の演奏家による演奏会企画

2024年度に開催する演奏会企画を募集いたします。

【対象】茨城県にゆかりのある演奏家や県内を中心に活動している演奏団体

【申込期間】5.9(火)~6.9(金)

※応募資格や応募方法は当館Webサイトをご確認ください。

茨城の名手・名歌手たち 第31回 出演者オーディション

10.29(日)に開催予定の演奏会に向けて出演者オーディションを行います。

【開催日】6.17(土) 鍵盤楽器・弦楽器・邦楽器部門(以上ソロ)、
邦楽アンサンブル部門

【申込受付期間】5.6(土)~5.20(土)

※受験資格などや応募方法は当館Webサイトをご確認ください。

市民のためのオルガン講座 2023年度受講生募集

- ・実技レッスン(初級):秋から半年間、12回のレッスンで基本的奏法を学ぶコース(定員4名)。
- ・実技レッスン(中級):初級を修了した方が、より高度な曲に挑戦するコース(定員若干名)。
- ・一回体験:気軽にオルガンを体験できる1時間のコース(定員12組)。

【申込受付期間】4.1(土)~4.30(日)

※レッスンの日程や応募方法は当館Webサイトをご確認ください。

2023年3月7日発行(第255号)

編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村晃、関根哲也、高巢真樹、篠田大基、鴻巣俊博、高木春佳

発行:(公財)水戸市芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118(音楽部門)

Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30~18:00・月曜休館) <https://www.arttowermito.or.jp/>

デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本:山三印刷株式会社

編集後記

お酒を飲むことはおそらく身体に負担がかかることなのでしょうが、近所のバーでパーテナーさんと他愛もない話をしながらグラスを傾けていると、なぜだか心も身体も(財布も)軽くなります。まさに「パーテナーは心の名医」(鴻)

アルゲリッチさんがピアノを弾いたCDはないかな、と探しましたら、いくつか見つけれました。なかにはアルゼンチンのタンゴ演奏家たちと共演した録音も。熱い演奏。ピアノでもアルゲリッチさんはやっぱり凄かった!(篠)

江戸時代に「UFO事件」があったことなど知らなかった。UFOたる「うつろ舟」が漂着したのが神栖の舎利浜だと伝えられていることも。話題の常陽史料館「うつろ舟」展。まさに地元茨城に伝わるミステリーで、頭の中は?だらけになった。(て)

春が近づいてきました。昨年は、お酒を飲みながら花見、どころか、花見すらも出来なかったので、今年こそは花見だけでもしたいです。でも、千波湖の桜のライトアップ見ながらお酒飲めたらさっと最高ですね!(春)

近所の市役所にストリートピアノがある。元は廃校になった小学校音楽室で半世紀以上使われたグランドピアノとのこと。先日弾いてみたら、通りがかりの方々と束の間、温かいやりとりが生まれました。ピアノから広がる輪に感謝。(樹)

1985年から学生時代を過ごしたつくばには、磯崎新氏のつくばセンタービルが2年前に完成しており、ここで私はポストモダンの洗礼を受けた。その後、水戸芸術館で再び磯崎建築に身を寄せている。磯崎氏発案の3部門合同企画「日本の芸術1960s」は私の宝物だ。氏の冥福をお祈りする。(中)

Lucky FM 茨城放送

「水戸芸術館 presents みんなのクラシック」

毎週日曜 7:30~8:00

パーソナリティ:石井哲也アナウンサー

出演:音楽部門学芸員(月替わり)

学芸員がおすすめの曲をご紹介します、クラシックの魅力をお届けする番組です。

▼Lucky FM ウェブサイト

<https://lucky-ibaraki.com/>

▼radiko(ラジオ)でもお聴

きいただけます

<https://radiko.jp/>



好評
放送中!

演劇・美術のイチオシ企画!

ACM劇場

◆ゆうくんとマットさんの「くものすおやぶんとりものちょう」

4.29(土) 11:00~15:00~

4.30(日)、5/2(火)~5(金) 各日11:00~

[原作]秋山あゆ子『くものすおやぶんとりものちょう』(福音館書店)

[脚本]Ukm3+又吉知行

[構成・演出]Ukm3

[出演]ゆうくんとマットさん(大内真智・小林祐介)、堀口理恵、ほしら、篠原立



現代美術ギャラリー

◆磯崎新一水戸芸術館を創る〜

3.1(水)~6.25(日)

[休館日]月曜日

(祝日の場合は翌火曜日)

[開場時間]10:00~18:00

(入場は17:30まで)

[入場料]無料



今年はお花見、
できるといいね。
外でも燗酒飲みたいなあ。

